

絵画の指導についての模索

— 自作を教材として用いる試み —

黒 木 重 雄

A Search for Instruction on Painting

— An Attempt to Use my Own Works as a Teaching Material —

Shigeo Kuroki

絵を描くとは「なぜ描くか」「なにを描くか」「どう描くか」の三つの問いに取り組むことだ。「なぜ描くか」で生き方を問い「なにを描くか」で価値観を問い「どう描くか」で経験を問う。重要度は「なぜ描くか」「なにを描くか」「どう描くか」の順だ。

絵を指導する立場になって20年が経つ。無責任だが、肝心の「なぜ描くか」「なにを描くか」は避けて「どう描くか」ばかりを教えてきた。理由は簡単、前者二つは、どう教えればよいのか分からなかったからだ。もっと言えば、教えることはできないと諦めていたからだ。そんなわけで、適当にごまかしながらやってきたのだが、そのごまかしが積もり積もって、とうとう数年前に自分の教え方に嫌気がさした。やっぱり「なぜ描くか」「なにを描くか」を伝えなければ、お稽古事になってしまう。絵を描くことは、お稽古事ではない。

そこで、考えたのが、自分の制作の全てをオープンにする試み。想像するに、昔、徒弟制で絵が描かれていた頃、仕事場には師匠が苦悶する姿や歓喜する姿などが溢れ、弟子たちはそれらを浴びるように感じることはできたのではないか。そうして、絵に関する諸々、特に、目に見えないことは“教わる”よりもダイレクトな“感じる”によって伝えられたのではないか。言い換えよう、目に見えないことは、生き方や価値観だ。先の師匠たちに比べると私のそれなど塵にも満たないが、絵を描くことに、同じように苦悶し、同じように歓喜している。だとすれば、自分の制作の一部始終を曝け出せば、

いくらかの「なぜ描くか」「なにを描くか」が伝わるのではない。確証はない。

とりあえず実験的に始めてみた。真っ白なままちっとも進まないキャンバス、描き出したかと思ったら塗りつぶし、失敗を重ねながらどうにかこうにか完成まで辿り着く、あるいは完成に辿り着けずにふりだしに戻る、などなど、描きかけの絵を前にして大概にかっこわるいところを見せた。話もした。成果と言えるかどうかかわからないが、この方法を採用してから、学生との距離がグンと近づいたように感じている。お稽古事の先の世界に踏み込んでいるのかもしれない。

本資料では、2003年から始めた『自作を教材として用いる試み』の中から10点を図版と解説によって紹介する。解説はゼミ生に対して話した内容の一部である。

1 Lockerhenge

2004, Acrylic on Canvas, 1820mm×2275mm

機能を追及した形は美しいものだ。ただし、スチールロッカーはいただけない。あれほどまでに無駄を削ぎ落としていながら、ちっとも洗練されていない。そんな、誰からも愛されないベストセラーがつつい愛おしくなって、絵に描きたいと思った。

レンガをスチールロッカーに見立てて、どう並べるかをシミュレーションしていたら、人類が創造した美しいもののひとつストーンヘンジに行き着いた。多くの神秘に包まれたストーンヘンジを、神秘のかけらも無いスチールロッカーで再現。ばかばかしいと鼻で笑われそうだが、それでいい。ばかばかしいこと、くだらないこと、無意味なことは、芸術だけに許された言わば“超越の美”だ。ちょっと逃げ口上だが、作品の出来はイマイチながら方向性は間違っていないと慰めて、まあまあ満足の作品。

2 Fairy

2004, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

私の絵は解り易すぎる。描いてあるものはもちろんのこと、その背後に流れる想いまでもがストレートに伝わってしまう。もっと煙に巻いたような「なんじゃこりゃ？」と思わせる絵を描いてみたい……。悶々としていたら、ボッシュの怪物が頭の中でうごめいた。ボッシュの絵はよくよく見ると「なんじゃこりゃ？」のオンパレード。で、多分に影響を受けて“ラッパを被った人”を描くことにした。絵描きにとって他人の影響は毒だが、ボッシュほどの超人の影響ならば、喜んで受けよう。

余談だが、この作品をグループ展に出品した際、恩師石井秀隣（前高鍋町美術館館長）

が一言。「下の木は要らないんじゃないか？でも、そうすると人はもうちょっと上に描かなきゃいかなー」。一瞬で絵のバランスを的確に把握されていることに敬服。他人の絵でさえも、これだけ見抜けるのだから自身の絵に対する厳しさはいかほどか……。この時ばかりは「どう描くか」は大したことじゃないと言っている自分を青臭く感じた。

3 On the Refrigerator

2004, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

『Lockerhenge』のところで、スチールロッカーへの偏愛は述べた。実はこの絵、アイデアの段階では、冷蔵庫ではなくスチールロッカーだった。黄色い部屋のスチールロッカーの上に怯えた少女が立っているというサイキックなもの。しかし、壁の黄色とスチールロッカーの灰色がどうしても合わない。ここは灰色じゃなくて白じゃないとだめだ。そこで、白くて大きなものに変更することにした。冷蔵庫。日常に潜む不安が“病みの白”によって、かえって際立った。

4 Blue Pail

2005, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

公園に立つ小屋の数々、ダンボールはたいして気にならないがブルーシートは目障りだ。ブルーシートは現代を代表する醜悪なもののひとつ。さて、絵描きは、描く対象として“美しいもの”も選ぶが、ときに“醜悪なもの”も選ぶ。そして、醜悪なもの醜悪さを描くこともあれば、その中に潜む美しさを描くこともある。枝分かかれはさまざまだが、一番新鮮なのは、やはり最後の枝分かれだろう。誰も見向きもしないようなものを、みずみずしい感覚で美しい絵に仕立てる。これほどの醍醐味はない。

本作は当初、都会の谷間にひっそりと佇むブルーシートの小屋を描くつもりでいた。よくあることだが、途中で計画を変更した。実は、この絵の制作中に『Tokyo Godfathers』（今敏監督）というアニメーションを見た。そこに描かれていたのは、新宿ホームレスの生活。ブルーシートの小屋が見事に描かれていた。「先約ありか……」。私の絵なんかよりも遥かに美しい映像を目の当たりにして、戦意喪失。ブルーシートを描くのは止めた。代役は何かないか？と悩んだ挙句、青いバケツに辿り着いた。切れそうになる気持ちを騙し騙し、なんとか完成までこぎつけたが、所詮、妥協の産物、満足いくわけがない。

5 Goldfish

2005, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

うぬぼれだが、2000年の『オタマジャクシ』と『コオロギ』はいい作品だと思っている。大画面の中にぼつんとちいさな命、はかなきゆえに人間を描くよりずーっと命がきらめく。そんな命きらめく絵を再び描きたいと思っている。「繰り返しやアレンジでは進歩がない」と、ことあるごとに言っているだけに、この動機はバツが悪い。

この絵は色から始まった。どんよりと沈む気持ちに呼応して、キャンバス一面に塗った色は鈍い緑。予期せず、鈍いのに透明感のある緑になった。さて、何に仕立てるか……。深い森の中を彷徨うかのようにキャンバス上でイメージを探った。いろんなイメージが去来したが、いずれも樹木の緑だった。いまいち乗れない。せっかくの神譲りの透明感が、樹木では活かしきれない。透明感、透明感、透明感、そうだ、水だ。藻のはった水槽を「何かいるのかな？」と覗き込んだ古い記憶に繋がった。見え隠れする金魚の緋、はかなくきらめく。

6 Captured Angel

2006, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

以前、細くて長い線を引くのに散々苦勞した覚えがある。マスキングテープを根気よく数ミリ幅で平行に貼って塗ったり、注射器に絵の具を入れて押し出したりと、いろいろ試してみたが、上手くいかなかった。マーカーを使えばいとも簡単なことが、筆だと極めて難しい。こんな理由から、檻を題材にした絵を描きたいという気持ちはあったが、線を引くのが憂鬱なため長い間後回しにしてきた。ところが、5年前、アメリカの画材屋で“ビーグラー”という名のローラー型の線引き道具を見つけた。ひとつ買って試してみたところ、モヤモヤがスーッと消えるかのように美しい線がどこまでも長く引けた。嬉しくなって、早速、製造元から全ての幅を取り寄せた。「これでいつでも描ける」と思ったら描く気が失せた。あれから3年、いつものように描きたいものが浮かばずガラガラとスケッチブックに落書きしていたら、ふと、檻のイメージが現れた。と同時に、描きたい気持ちも復活した。

お気に入りの道具を久しぶりに手にしたドキドキが刺激になって、続けざまに檻の絵を7点描いた。『Captured Angel』はその中の1点。他に『Captured Animal』『Captured Death』『Captured Moon』『Captured Flower』『Captured Southern Sky』『Captured Ghost』がある。これらを一堂に並べれば、ひんやりとした空気が漂う薄暗

い実験室になる。

7 Cooking

2006, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

あるグループ展に誘われた。テーマは『人物・風俗』。会期までに十分な時間があったので気楽にOKした。しかし、テーマが憂鬱に押し掛かって先に進まない。そういえばテーマが先に決まっている制作は、これまで殆どやったことがない。だんだん会期が近づく。逆算するともう失敗は許されないところまでできてしまった。焦る。時間に追われると安全な方へ流れてしまいがちだ。これはその典型。どうなるかが予測できる言わば確認済みのものだけで描いてしまった。絵が新鮮であるために不可欠な要素“冒険”が盛り込めていない。反省。

8 Sebastiano

2006, Acrylic on Canvas, 1303mm×1620mm

久々に料理しがいのある素材を思いついた。タコウィンナーだ。ばかばかしくてこっけいでかわいくてちょっとエロチック、こんな何拍子も揃った素材を思いつくことはそうそうない。どう料理するかにも熱が入る。さんざん迷ったあげく最終的に行き着いたのは、タコウィンナーの討ち死。一匹のタコウィンナーにたくさんの楊枝を突き刺して画面中央の皿の上に安置した。最初はウィンナーらしく赤色で描いていたが、どうにも収まりが悪く、灰色にしてしまった。配色計画に無理があったばかりにタコウィンナーの魅力半減。残念ながら最高の素材に最高の調理とはいかなかった。なので、次回、再チャレンジの条件を付けて一応の完成とした。

そういえば、ヨーロッパの美術館でよく見かける“聖セバスチャン”はどれも無数の矢で射抜かれている。不謹慎だが、ささやかな共通点を見つけたので、題名を“聖セバスチャン”にした。しかも、ルネサンスっぽくイタリア語にした。

9 Ribbon

2006, Acrylic on Canvas, 1620mm×1303mm

こんな絵を本当に描きたいと思っているわけではない。騙し絵なんか新しくもないし、リボンなんかを描きたいと思うほどウキウキと生きているわけでもない。なのになぜか、スケッチブックに向かうとリボンを描いてしまう。たまにある。別のものを描こうとし

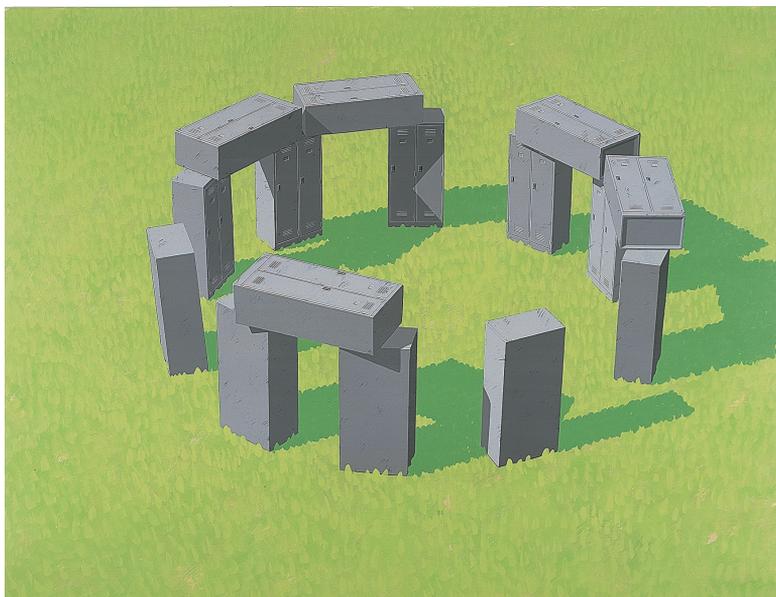
でも、あるイメージが付きまとして抜け出せない。どうにか先に進もうともがいてみる
が、どうにもならない。障害物に引っ掛かってしまったような感じ。先に進むためには
障害物を取り除くしかない。「ハァ、描くしかないか・・・」。描き始めて2週間ほどで
完成。やれやれ。ようやく障害物が無くなったので、本当に描きたい絵に向かって再び
前進！

10 Butterfly, Ladybug and I

2006, Acrylic on Canvas, 1620mm×1303mm

絵は離れて見るものだと教わってきた。たいして疑いもせず、それを信じてきた。と
んでもない間違いだった。たぶん離れて見なければならぬ絵は、宮殿や教会の壁を飾
るバカでかい絵の類と印象派以降の一部の絵だけで、全体からみれば少数に過ぎない。
絵の大半は手に取れる近さで見るといい。色々な美術館を訪ね歩いてそう思った。

昨今の日本の絵画界はまさしく遠距離鑑賞志向。公募展でもコンクールでも1メート
ル四方を越す作品ばかりが並び、ちょっと離れて鑑賞するのが慣わし。描く側も“慣わ
し”という規範に囚われて、それなりのものをそれなりの描き方で描く。皆がそうだと
ひねくれたくなる。どうみても画面サイズに似つかわしくないものを描いてみようと思
う。大画面にテントウムシ。使い慣れない極細のセーブルで1ミリの手足や触角を描く。
完成。予想通り、近づいて見るには画面がスカスカで、離れてみるには肝心要が小さすぎ
る、なんとも無意味な結果となった。とはいえ、絵としては破綻してしまっただけで、
存分に冒険したので気分は良好。残念ながら、気分爽快といかなかったのは、覚悟が足
りなくて結局1.5倍に拡大してテントウムシを描いてしまったため。次は原寸の8ミリ
でいこう。



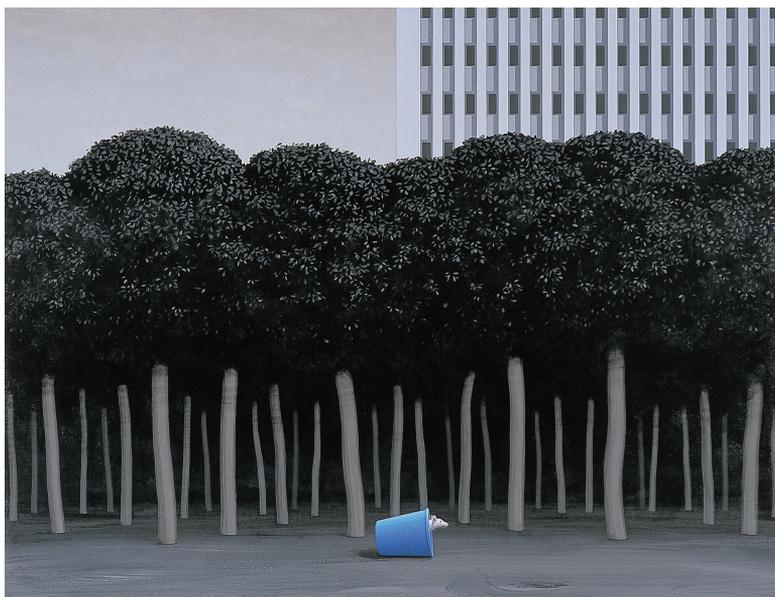
1 Lockerhenge



2 Fairy



3 On the Refrigerator



4 Blue Pail



5 Goldfish



6 Captured Angel



7 Cooking



8 Sebastiano



9 Ribbon



10 Butterfly, Ladybug and I